

ジュニア



選

横田順彌・編

クロッカスの少年



ふるさととは宇宙船

堀 晃

テスト

眉村 卓

次に来るもの

今日泊亜蘭

クロッカスの少年

横田順彌

植民星アルテアⅣ

豊田有恒

ジュニアSF選

クロッカスの少年

1987年10月26日 初版第1刷発行

編者 横田 順 彌

発行者 田 辺 徹

発行所 草土文化(そうどぶんか)

〒102 東京都千代田区五番町10-6

TEL 03(264)0631 振替・東京5-46122

印刷所 光陽印刷 製本所 昇栄社

ISBN4-7945-0304-0 C8093

クロツカスの少年

イラスト・落合 茂
装 幀・篠崎三朗

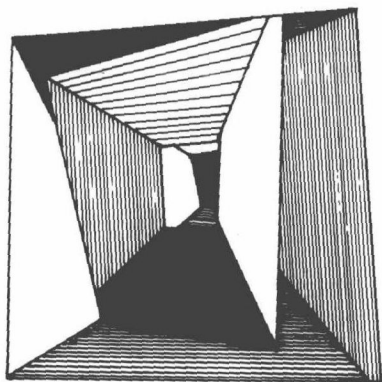
もくじ

ふるさとは宇宙船……………堀	晃……………5
テスト……………眉村	卓……………27
次に来るもの……………今日泊亜蘭	……………67
クロツカスの少年……………横田	順彌……………85
植民星アルテアⅣ……………豊田	有恒……………127
解説……………横田	順彌……………190

ふるさと宇宙船

堀^{ほり}

晃^{あきら}



手製のりのなかでざわざわとうごめいているネズミは、プラチナのようにするどい歯で、確実にかべを食い破りつつあった。タケルは期待に目をかがやかせて、ネズミたちの作業を見つめた。

（あと三日で穴があきそうだな……）

そこにできあがるネズミのにげ道は、タケルにとっても、この世界から未知の世界へ通じる脱出口になるはずだった。

物心ついたところから、タケルは、厚い金属のかべで囲まれたこの世界で一生を過ごさねばならないと教えられてきた。

手のつけられない不良少年とレッテルをはられる年齢まで、タケルの生活範囲は限られていた。寝起きのためのごくせまい部屋。食堂。教育ルーム。体育ルーム。娯楽のための映像ルーム。これらの部屋は細い通路でつながれていて、これ以外の場所に出ることはめったになかった。時たま労働奉仕のために、食糧を生産しているクロレラ培養区へ行くことがある程度だった。

これがタケルの知る世界のすべてだった。八人いる年ごろの若者たちにしても同じことだっ

た。

タケルが一生を過ごさねばならない世界について教えられたのは数年前、十五歳さいになったときだった。仲間のだれかれから、それとなく聞いてはいた。が、はっきりと確認かくにんしたのは、毎日強制的に向かわされるC A I装置そうちによってであった。

小さなスクリーンに、突然とつぜん、異様に青い球体が映し出された。

『これが地球だ』頭にすっぱりとかぶせられたヘッドホンから、聞きなれた合成音が流れた。

『これが、われわれ人類の誕生たんじょうした惑星わくせいだ。この星を忘れてはならない。われわれは、この青い惑星の表面に生活していた数十億の人間の最後の生き残りになるかもしれないのだ』

画面は次に広大な平面を映した。無限とも思える緑の草原。おいしげる樹木。ふりそそぐ陽光。

——それらは比較ひかく的に見なれたものだった。何度もスクリーンで教えられたものだったからだ。

『これが地球の自然だった。だが、この風景はもう現実には存在していない』

画面の様相は一変した。それは初めて見る光景だった。

草木はかけらもなかった。ただ赤くただれた荒地こうちの連続だった。空はどろのようににぎり、太陽は赤黒く、くずれかかった果実のようにふくらんでいた。海は血のように赤く、ぬらぬら

と照りはえて、微動もしない。

そこには生命の気配はまったくなかった。

『……これがわれわれの知る地球の最後の姿だ。機械文明の異常な発展が地球全体の自然のバランスをくるわたせたのだ。この環境の破壊されていった過程を、お前はくわしく学ばねばならない。が、今はこの風景を心に焼き付けておくことだ』

声はしばらく沈黙した。

『おびただしい死者が出た。人類の大部分が死亡したといってよい。生きのびたのは、ほんのひとにぎりの人間だ。それがこの世界に住む人間の祖先なのだ』

二百年前のことだ。

地球が破滅への道を急速に進みはじめたころ、衛星軌道上に巨大な宇宙船が建造された。長さ十五キロ、直径二キロ、超硬度合金の外壁を持つ船体には、ありとあらゆる科学技術の結晶がつめこまれた。船首の操縦室から、船全体を細部にわたって管理するコンピュータ部、人類史のあらゆる情報をのみこんだ記録室、そして生活空間、クロレラ培養を中心とする食糧生産部、合成加工部、そして三キロにおよぶ機関部、二千年にわたってエネルギーを供給するはずの原子炉、船尾の推進部にいたるまで、人類の持つ技術が総結集されていた。

その宇宙船では百人が生活できた。人口の大きな変動がないかぎり、そこは自給自足の生活ができる世界だった。何世代も種族を残せる小世界だった。

まさに超小型の地球といえた。皮肉にも、地球を破壊する原因となった文明は、その総力を結集して、地球の超小型モデルを十数隻残しただけだった。高価な遺産だった。

生存者は一千人に満たなかった。

『……この船が地球をはなれて二百年になる。われわれは、わし座アルファ・アルタイルを目ざして旅をしている。そこに生存可能な惑星が存在するかどうかは保証されていない。だが、われわれが人類最後の生き残りかもしれない。これを忘れてはならない。今、この宇宙船は、地球から六光年、目的地まで十光年の空間にある。……到着まで、あと三百年以上ある。到着するのは、まだ幾世代も後だ。そのために、今、船の機能と安全を守る努力をしなければならぬ……』

タケルは画面の、こおりついたような星空にうかぶ、にぶく光る金属のかたまりを見た。それが外から見るタケルの住む世界だった。

五百年、十六光年……限られた部屋と入り組んだ通路しか知らぬ彼には、およそ実感をとまなわぬ数字だった。

タケルが同年代の仲間から孤立こりしていたのは、その頑強がんきやうすぎるからだのせいかもしれない。彼は他の八人に比べて、とびぬけて長身だった。うでは筋肉がもり上がり、こしから足にかけてはバネのように肉がしまっていた。

動作はじゆうなんかつびんしょうであり、しかも動物のように感覚がえいびんだった。とりわけ耳はよくきいた。小さな足音、かすかなささやき、わずかな機械しんとうおんの振動音などを、タケルは正確に聞きわけた。

彼はめぐまれたからだをもてあましていた。だからティーチング・マシンのきゆうくつな席について、プログラム学習を強制されるのが苦痛だったのだ。

船で生まれた子どもは、一定の年齢ねんれいに達すれば、親からはなされ、教育区に移された。そこで十数年間の学習を受ける。指導はコンピュータが個人の能力に応じて行なう。定められた教程しゅうりょうが終了した時点で、成人と認められ、生活区域にもどされ、宇宙船の各部署で任務につくことになっていた。

タケルと同世代の若者は全部で九人だった。タケルを除く八人は一様に従順だった。決められた時間を学習パネルに向かって過ごし、予定通りプログラムを消化していった。適度に体育

ルームでからだをきたえ、コンピュータを利用したゲームを考案し、自室のコンピュータ端末で記録室の情報を引き出し、教養を高めることも忘れなかった。

タケルは学習にはほとんど興味を示さなかった。当然、進捗状態はおくれ、仲間から相手にされるのが少なくなった。

教程のおくれを注意する者はいなかった。プログラムが消化できなければ、ふつうの生活区へもどるのおくれることになる。いわば幽閉期間がのびるだけのことなのだ。

外部から人がおとずれるのは限られている。月に一度親が面会に来るほかは、「ウォッチ」と呼ばれる男が時々顔をのぞかせるだけだ。

タケルの父は、他の仲間の親と同様に、月に一度会いに来た。タケルは父の名を知らない。成人すれば、名は職務によって呼ばれるそうなのだ。彼の父は、「コーサー」という。

母は十年以上前に死んでいて、タケルの記憶にはない。が、彼女の死体の成分は、合成食品に混じって、タケルの体内を通ったことはあるはずだった。死体も廃棄物も船外に捨てられることは絶対ない。何段階もの加工を経て、最も効率のよい経路をじゅんかんしているのだ。

父と面会しても話すことはない。話題はもう何年も前に尽きていた。今はタケルの教課の進捗状態をたずねる。タケルは正直に答える。その進捗のかんまんさに今さら落胆をあらわすこ

とはない。あと何年だな、とつぶやくだけだ。それで面会の話題は終わる。

以前ならタケルは、

「ここを出たらどんな仕事をやるんだ？」

と熱っぽくたずねたものだった。

父の返事は決まっていた。

「この宇宙船の運行状態を維持いじするための任務が待っている。今はそのための勉強が必要なんだ」

それ以上くわしくは教えてくれなかった。さらに追究しようとすれば、

「禁じられている」

という返答だった。だれに禁じられているかも不明だった。

面会は十数分で終わる。それ以上の時間がほしいとは、タケルは思わなかった。

（二十年後には、やはりおれも同じことを子供にくり返すのだろうか。そのくり返しは三百年続くのだろうか……）

いつも、やりきれぬ焦しょう躁感そうかんが残った。

ウォッチという男は、いつとは決まっていけないが、週に一度くらい教育ルームに現われた。

彼の名の由来は、クロレラ培養槽の見張り役だからということだったが、本当はタケルたちの監視人だからかもしれない。監視人だからかもしれない。

年齢は三十歳くらいに思えたが、正確には知らない。自分の親と比較して推定してただけで、ことばにも動作にも特徴はなかった。適当に仲間の相手になってはくれたが、特に積極的ではない。彼もまた外部の何かに強制されて動いている気配があった。

タケルが彼に好意をいだいていたのは、時たま労働奉仕という名目で、教育区から連れ出してくれるからだった。

行き先はクロレラ培養区で、仕事はネズミ退治だった。この仕事は重要だった。

ネズミのはんしよくを許したのは、宇宙船建造にもなう唯一のミスともいわれていた。必死で生きのびようとしたのは人類だけではなかったのだ。過去何度か、培養槽がネズミにあらされたため、食糧の補給が危機におちいったことすらあるという。

ネズミ退治に決定的な方法はなかった。彼らの採用していたのは、手ごろに切りつめた合金パイプでなぐりつける、きわめて原始的な方法だった。

タケルはこの時ばかりは拔群の運動神経を発揮した。細い通路をにげまどうクマネズミを正確に打ちすえた。

この瞬間、パイプから手首にずしんと伝わるしゅうげきに、タケルはたまらぬ充実感を覚えた。それはスクリーンを通しては絶対に得られぬ感触だった。

時にはひとかかえもありそうなネズミをたおすこともあった。

それらの戦果は、また、タンパクの補給源としても重要だった。

「……あせりすぎているのよ」

ミヤはタケルにいった。

その日、タケルはミヤとならんで、暖かい春の海をながめていた。ミヤは頭のいい女性だった。タケルと同年齢だが、学習プログラムは三年以上進んでいる。それだけに口調におとなびたところがあつた。が、仲間のうちでは、タケルに対して不思議にもものわりのいいところがあつた。

「どうせ船の外は永遠のやみよ。どうあがいたって、船をはなれて生活できる訳はないのよ。一生船の中なら、あとはその中で生活を充実させることを考えるしかないわ」

ミヤはゆるやかな波のうねりを見つめたままいった。うねりは小波にくだけて、波頭は無限の銀粒のようにかがやいた。

「女にはわからないさ」タケルはぶつきらぼうにいう。が、どこかにあまえた調子があるのに彼は自分で気づいていた。

「男の子でもわからないわ」

「そうだろうな。頭が良すぎて感じないんだ」タケルはミヤの横顔を見つめた。「どうせ生活区へもどるんなら、なぜ今もどれないんだ」

「それはね、この宇宙船が管理する仕事につくためには、プログラム学習を完全にマスターしなければ無理なのよ。船は科学技術の粋^すを集めたものなのよ。高等数学もエレクトロニクスも身につけておかないと……」ミヤはお説教口調になった。

「おれにはネズミ退治ができるさ」

タケルはつぶやいた。それから語調を強めた。

「大体おかしいと思わないか？ おれたちはまだ一度も、その高度な知識を必要とする仕事の現場を見たことはないんだぜ」

「船はこの通り高度な技術で動いているわ」ミヤはややむきになった。

「わかってるさ。だが、単に生活するだけに高度な知識は必要なのかどうかかわらない」

波がちよっとまぶしすぎるな、とタケルは思った。